

太宰治「碧眼托鉢」におけるアンドレ・ジツドの

講演『シャルル・ルイ・フィリップ』の受容(二)

——「歓喜」と「生の躍動」に満ちた「市井の正義派」としてのフィリップ

宮 崎 三 世

太宰治の随筆「碧眼托鉢(一)」の「フィリップの骨格について」という章は、淀野隆三訳のシャルル・ルイ・フィリップ『小さき町にて』⁽²⁾が送られてきたと述べることで始まる。大正十五年五月に叢文閣から刊行された『シャルル・ルイ・フィリップ』⁽³⁾という本を用いて、フィリップの「まことの人となり」⁽⁴⁾について語っている。⁽⁵⁾そしてフィリップを「厳肅なる半面の大文豪」⁽⁶⁾と評価している。叢文閣単行本は、フィリップが亡くなった後の一九一〇年十一月五日に行われたアンドレ・ジツドの講演を、主として収めたものである。本稿では、太宰の随筆と叢文閣単行本を併せて読むことによって、太宰がジツドからどのような点を受容したのか、そして随筆でフィリップを「市井の正義派」⁽⁷⁾と呼んだことの意味はどういうものかを明らかにしたいと思う。

一 太宰のフィリップ理解(一)——「歓喜」と「生の躍動」

「フィリップの骨格について」では、「けだものの如くに泣いた」こと⁽⁸⁾や自らの強さについて語るフィリップの言葉、そしてジツドの言葉が鉤括弧でくくられて並べられている。「二十五歳」「二十八歳」「三十四歳」と、フィリップの年齢にも順に言及されている⁽⁹⁾。一見、年齢とともに変化していく作家の姿を伝えているように見える。この章では叢文閣単行本を参照することで、それらの言葉の意味をより明らかにしたいと思う。考察の便宜上、太宰の随筆における、叢文閣単行本に基づくフィリップとジツドの言葉を、順に①②の数字で示す⁽¹⁰⁾。全て初出誌『日本浪漫派』の72頁に拠る。叢文閣単行本からの引用については、鉤括弧の数字で頁数を示す。

まず、①「けだものの如くに泣いた」という言葉についてである。このフィリップの言葉は、ジツドの講演を読むと、「僕はいいい気持で泣いた」(11頁)と続くことが分かる。フィリップが次のように述べる通り、①は「大きな歓び」と関わっている。

〔前略〕これから思ふ存分泣いて見る気だ。大きな歓びに溢れることたらう。何しろ泣くことが僕の一切の悩みを和らげてくれる。つまり僕を非常に幸福^{たのしみ}にしてくれることなんだ。(11頁)

ジツドは「フィリップは唯一の逸楽^{たのしみ}として涙を求めた」が、「彼はいつもそんな無益な歓びちや満足してはゐなかつた」(12頁)と続けている。そして「嘆息の下から嘆息を突破し突如として意外な語調が勃発」し、「真のフィリップが現はれ出」でた(16頁)と紹介するのが、次の書簡である。次の書簡は、太宰の随筆の②の書簡すなわち「僕らは、將に生れんとする新しい時代に属してゐる」と「断言」し、自らを「キリストの出現を言い当てた予言者」とする書簡を理解する上で欠かせないものである。

『前略』君と僕とは平凡な方だ。が、ともに内的生活が緊張してゐる。従つて僕らの性格が最もよく作品を裏書いてくれるのだ。しかして、僕等の感動がそれを豊富にし、堅実にし善良にする。何故なら、それらのものは人道的であり永遠性をもつからだ。しかるに、X君に到つては、彼はあまりに教化を持ちすぎる。お互に博学多才であつてはならない。アナトル・フランスは気持のいい作家だ。何んでも彼は識つてゐる。どんな表現でもする。彼は博学者といつてもいい。だからこそ畢竟彼は亡びゆく文壇人だ。そして、それが十九世紀文学の結論といふ可きである。故に我々は今日むしろ野人の出現を待つ。我われは本の知識に依らずに、もつと神の近くにある可きである。我われはもつとありのままの生活に触れなければならない。我われは力を持ち、時には忿怒を持たねばならない。生やわらかさや、デレツタンテイズムの時代が去つて今や我われは熱情の時代の初頭にある。』(17-18頁)

この書簡を、ジッドはフィリップの「結論」と捉えている(18頁)。続けて②の書簡を引用している。そのため、②の「新しい時代」とは「熱情の時代」のことである。フィリップは、創作において「内的生活が緊張してゐる」ことすなわち「感動」を重視している。「博学多才」で「何んでも」「識つてゐる」作家は「亡びゆく文壇人」であり、それが「十九世紀文学の結論」である。「新しい時代」を担つていくのは、「神の近くにあり」、「ありのままの生活に触れ」、「力」や「忿怒」を持った「野人」としての作家であると考えられている。

③の「ミケランジェロと老ダンテ」そして「ニイチエ」に対して「からだがふるえる」というフィリップの書簡について、ジッドの講演で次のことが紹介されている。フィリップがニーチェを「我が悩みの良剤であり、僕を強壯にする興奮剤」(22頁)と捉えていることである。

ジッドの講演では、フィリップが②のように「新しい時代に属してゐる」と自覚するに至つた理由について、「どう

してそうだったのか？　フィリップはドストイェフスキを知ったのであった」（18頁）と説明している。そして太宰が引用した④の「白痴」を「野蛮人の作品」とする書簡を引用している。④も「熱情の時代」に関わる書簡である。

太宰の随筆では次に、⑤の書簡すなわち自作『ビュビュ・ド・モンパルナス』についての批評に対して「君は、僕の強さを忘れて居る」とフィリップが反論する書簡が引用されている。ここでフィリップは、自分が「強い人間」であることを、「執拗な抵抗力」「勇氣」「強い男」「猛烈な意志」という表現を用いて繰り返し主張している。⑤については特にジツドの講演から説明することはない。

太宰の随筆ではニーチェの名前が二度現れており、⑥の書簡でフィリップは自らを「ニーチェに近いかも知れん」と述べている。③の書簡について確認した通り、フィリップは「悩み」を癒やし自らを「強壯」にする存在としてニーチェを捉えていた。

⑦の書簡では、フィリップが「勇氣」や「力」を持っていることを主張している。この書簡は、ジツドの講演で「彼は強健で豪胆だと思つてゐます」（55頁）と述べられてから引用されている。

次に、「アンドレ・ジツドに与ふ」（⑨）としてから挙げられている、「早く男らしくなつてくれ」そして「立場をどつちかに」「きめてくれ」と言う⑩のフィリップの書簡について考えてみたい。この書簡は、ジツドの講演でクロードルについて言及される箇所と関わっている。ジツドはまず、「ニーチェの読書がそうであるやうに、クロオデルのそれは勇躍的な力を与へた」（26―27頁）と説明している。そして「勇躍的な力」について次のように述べている。

「前略」彼に同情心がなくなつたといふんぢやない、が今になつてそれは何の足にもならず、遠くではあはれみを感じずるにすぎなくなつたのである。彼は哀しみを持たなくなつたといふわけではないが、その哀しみ、男らしくて厳しい悲しみが絶大な力と歓喜への勝利の障害とならぬのである。それは眞の歓喜である。悩む者と病む者の荒ら

あらしい健康の感激である。そはニイチエが彼に教へた征服せる最上の健康なのである。

この絶大な凱旋の歡喜、悲壯ではなくて強壯に確固たる歡喜こそクロオデルが彼に教へたところの歡喜なのである。(27頁)

ジッドは、かつてフィリップが持っていた「同情心」や「哀しみ」がなくなったわけではないと述べている。「男らしくて厳しい悲しみ」が「絶大な力と歡喜への勝利の障害となら」ないのであり、それが「眞の歡喜」であるとしている。フィリップがクロードルに「悲壯ではなくて強壯に確固たる歡喜」を教えられたと説明している。

そしてジッドは、「かくもクロオデルのあふるる許りの幸福を彼にゆるした秘密は何んであつたらうか」(28頁)と問い、次のように答えている。

私は恰度その当時フィリップがカトリック教に歸依しようとしてゐた矢先だと見て取る。当時かれは、私に宛てて『君も知つての通り、どうせ皆そこへ落着くのに、何にも頑張る必要もあるまい』といふ意味のことをいつてゐるのもわかる。「参考」其四参照(28頁)

ジッドは、「フィリップがカトリック教に歸依しようとしてゐた」ことが、「幸福」すなわち歡喜を得た「秘密」と述べている。その証拠として挙げられているのが、二重鉤括弧で引用されているフィリップの書簡である。引用の最後の指示に従つて、叢文閣単行本の「三 参考」の「其四」(106頁―107頁)を見ると、書簡全文が挙げられている。「与ふ」や「男らしく」「立場をどつちかに」「きめ」という文言が一致していることから、太宰が⑨⑩の言葉を用いたのは、この書簡全文からである。以上のことから、ジッドは⑩の書簡について、クロードルに「強壯に確固たる歡喜」を教えられたフィリップが、「カトリック教に歸依」することをジッドに勧めたものと考えていることが分かる。

しかし、ジッドは講演の最後に、⑩の書簡について、別の人物による解釈も示している。講演の最後からは、太宰

の⑦の書簡が引用されていることもあり、別の解釈についても考え合わせる必要がある。ジッドは「フィリップの最も古いとして彼を最もよく知つてゐる親友のひとり」である「マルセル・レエ」が、ジッドの講演について「カトリクの影響」を多少重大視して「いるのではないかと評していることを紹介している(55-56頁)。

私の知つてゐる限り、フィリップは改宗の途上にも行つてゐないやうです。彼れのクロオデルを羨望したのはクロオデルの信仰よりも力でした。

続けて「レエ」は、「フィリップが貴下と彼自身に陪食を勧めてみましたところのものは聖書ではなしに、あの一念と熱心さではありませんでしたせうか」と述べている。したがって、フィリップが⑩の書簡で「男らしく」「立場を「きめ」るように言つた時、「カトリック教に帰依」することと「一念と熱心さ」を持つことのうち、どちらをジッドに勧めていたかは分からない。⑩について言えることは、クロオデルに「強壯に確固たる歓喜」を学んだフィリップが、自分と同じようになることをジッドに勧めているということである。

⑫の書簡は、フィリップの「絶倫の力」と「約束」されていた「未来」に触れて「三十四歳」の死を惜しむジッドの言葉である。⑫については特にジッドの講演から説明することはない。

以上、叢文閣単行本を参照することで、太宰の随筆では「大きな歓び」・「熱情」・「強壯」・「歓喜」に関わるフィリップの言葉を引用していること(①②③④⑥⑨⑩)が分かった。その他、⑤でも「執拗な抵抗力」「勇氣」「猛烈な意志」を持つているという強さについて、⑦でも「意欲」によって「半面」を明らかにしたこと、⑫でもフィリップの力について述べられている。

ジッドの講演では、「ニイチエとドストイェフスキ」そして「クロオデルの影響も同じで」、フィリップを「同じ方向、即ち歓喜に導いてゐる」とまとめて説明されている(22頁)。同じ頁から太宰は③の書簡を引用している。また、

ジッドは「私は先刻フィリップは彼をして歓喜に満させるものか、乃至はもつとも元氣ある生の躍動に進行させることしか耳をかしげなかつたと述べました」(29-30頁)と繰り返している。すなわち、太宰は、ジッドの講演から、フィリップが、ニーチェとドストエフスキー、そしてクロードルから「歓喜」や「生の躍動」を得たという主張を受容し、そのような作家の姿を示そうとしたといえる。

二 太宰のフィリップ理解(2)——「市井の正義派」

(i) 「半面の大文豪」

「フィリップの骨格について」¹³⁾では、「半面」という言葉が三度反復されている。この言葉はまず、⑦のフィリップの書簡で「僕は、二十八歳にして、すでに僕の半面を切つた」と印象的に現れている。「僕がいま、はつきりさせた半面」とは、「意欲したところのもの」また「僕みづから動かした僕の発条」¹⁴⁾であり、「これこそ勇氣であり、力である」と述べられている。したがって、フィリップが「二十八歳」で「はつきりさせた半面」とは、前章で見たような「歓喜」や「生の躍動」という言葉で纏められる性質のことである。

「半面」という言葉は、⑦でもう一度現れている。「もう半面のあることを忘れるな」という部分である。「もう半面」とは、「はつきりさせた半面」の他に、まだ知られざる「もう半面」を持っているという意味と考えられる。しかし、太宰の随筆では、⑦に続けて、⑧の「なんのことはない、僕は市井の正義派であつた」というフィリップの言葉が記されるため、「市井の正義派」を「もう半面」として示していると考えられる。「市井の正義派」は、「歓喜」や「生の躍動」という自己を重んじることとは異なるからである。「半面」という言葉は三度目に、次のように語り手「私」がフィリップを評価する中で現れる。「かれこそ、厳肅なる半面の大文豪、世をのがれ、ひっそり暮した風流隠士¹⁵⁾のたぐ

ひではなかつた⁽¹⁶⁾。フィリップが「世をのがれ、ひっそり暮した」作家ではないという理解が示され、「市井」の中で書いたという点に再び注意が向けられている。「厳肅なる半面の大文豪」とは、フィリップが「歓喜」や「生の躍動」に満たされた作家であつただけでなく、「市井の正義派であつた」ことを賞賛したものと読むことができる。

(ii) 「市井の正義派」

⑧の「なんのことはない、僕は市井の正義派であつた」というフィリップの言葉は、叢文閣単行本に該当する箇所がない。調査しえた限りの「碧眼托鉢」までに出されたフィリップに関する評論において、「市井の正義派」及び「正義」という言葉でフィリップについて語るものはなかつた⁽¹⁷⁾。そのため、ジツドの講演で「正義」という言葉が三度用いられていることは重要である。この言葉に基づいて、太宰は「市井の正義派」という言葉を創作して随筆に加えたのではないかと考えられるためである。

叢文閣単行本の「一 シャルル・ルイ・フィリップ（講演）」は、3頁から56頁に続いている。前章でも見た通り、講演の中段で、ジツドは「諸君、私は先刻フィリップは、彼をして歓喜に満させるものか、乃至はもつとも元氣ある生の躍動に進行させることしか耳をかしげなかつたと述べましたが、それには不思議なしかも重大な例外があるので」（29頁-30頁）と述べている。ジツドは、それまでの前半部で、フィリップが、ニーチェやドストエフスキーやクローデルから「歓喜」や「生の躍動」に関わる点で影響を受けた、ということを述べていた。後半部では、「重大な例外」として、フィリップの友人であつた作家「リュシアン・ジアンの影響」（30頁）について取り上げている。

これ迄のいろいろの影響といふのはいはば彼自身を激励するものや氣力を向上させるものだったのに、このリュシアン・ジアンユニクな影響は緩和といふことを教へたのであつた。彼れの又とない友人であつたところのリュシアン・ジアンあの温容をばフィリップの口から紹介させよう。（30頁）

ジッドは、フィリップの受けた別の影響について「緩和」や「温容」という言葉を用いて述べている。フィリップがこの友人について「ほんとに美しい心の持主」（31頁）そして「寛大なそして純真な精神の持主」（32頁）と語る言葉を用いている。「正義」という言葉は、フィリップが友人の「遺作」の序文を「書きかけてみて死んでしまった」（33頁）ことを、ジッドが説明する中で現れる。

私はフィリップの書きかけた序文を見ましたのですが、フィリップの力点はどうして学問のないリュシアン・ジアンがあんなに完全な叡智の所有者になつたか、あんな独特な隣人愛の、知識の持主になつたか？ それはみな彼れの正義に対する深い要求に刺戟され、指導されたといふのであつた。この点、フィリップの中絶した序文を引受けたジョルジュ・ヴァロアも同じ考へを持つてゐるのである。リュシアン・ジアンについて彼はいつてゐる。『リュシアン・ジアンは事物を各方面から観察した深刻にして包括的な智の持主だつた。彼には完備した正義感といふものがあつて、それをもつてすべての人間に接したのである』（33―34頁）

ここで「正義」という言葉が二度用いられている。ジッドはフィリップの序文の「力点」として、「学問のないリュシアン・ジアン」が「完全な叡智の所有者にな」り「独特な隣人愛の、知識の持主になつた」のは、「正義に対する深い欲求に刺戟された」からだという考へを紹介している。そして「同じ考へ」を持つていた人がいることを示している。二例とも、ジアンが「叡智」や「知識」そして「智」の「持主」であつたことを、「正義」を重んじたことで説明している。ジッドの講演で「正義」という言葉は三度用いられており、最後の例は、ジッドが『クロキニヨル』という作品について語る中で現れる。

私は皆さんの御許を得まして『クロキニヨル』については少し長く話さして戴きたいのである。

この作品の立脚点は、二つの方向、二つの衝動の中におかれるのである。すなはち、ニイチエのより以上の歓喜

と生活、それからリュシアン・ジアンの上の正義といふ合流点におかれたのである。実に『クロキニヨル』はこの悲壯な邂逅のイリュストラションだともいへるのである。(36頁)。

ここでジッドは、「正義」を「歓喜」と並べ、それら「二つの方向」や「二つの衝動」を持つものとして『クロキニヨル』という作品を分析している。ジッドは、フィリップが「正義」へ注目したことを重視している。

既に述べた通り、他の資料に「正義」という言葉でフィリップを語る例は見られなかった。そしてジッドの講演で「正義」という言葉が繰り返されていることから、太宰はそれらの箇所を踏まえて「なんのことはない、僕は市井の正義派であつた」というフィリップの言葉を追加した可能性が高い。そうであるとしたら、次のように考えられる。ジッドは、フィリップが友人の作家に書いた序文に触れて、「正義に対する深い欲求」によって、「完全な叡智の所有者」そして「独特な隣人愛」の「知識の持主にな」という、フィリップの考えを紹介している(33頁)。太宰は、フィリップを「完全な叡智の所有者」と「独特な隣人愛」の「知識の持主」として評価しているといえる。その秘密が「正義」にあることを意識したものが、「市井の正義派」という言葉である。したがって、フィリップを「市井の正義派」と示すことの意味は、フィリップが優れた作品を書いた理由が彼の正義感にあつたことを、端的に示すことであつたと考えられる。

(iii) 「完全な叡智の所有者」と「独特な隣人愛の、知識の持主」

前節で述べた、太宰がフィリップを「完全な叡智の所有者」と「独特な隣人愛」の「知識の持主」と評価しているのではないかという点について、四つのことを補足しておきたいと思う。

第一に、「フィリップの骨格について」という章の始めて言及されている『小さき町にて』⁽¹⁸⁾というフィリップの作品を読むと、フィリップを「独特な隣人愛」の「知識の持主」と評価できるということである。太宰の随筆では「小

太宰治「碧眼托鉢」におけるアンドレ・ジッドの講演『シャルル・ルイ・フィリップ』の受容(二)

説集は誰のものでも一切、読みたくなかつた」時に、『小さき町にて』を「読んでみようと思」い、「読了して、さらに再読しようと思つた」と書かれている。⁽¹⁹⁾「淀野隆三の文章は、たしかに綺麗で、おつとりした気品さへ出てある」ということや、フィリップが「きめこまやかな文章」を書くことも述べられている。⁽²⁰⁾しかし『小さき町にて』の内容には触れられていない。『小さき町にて』には、次のように、貧しい暮らしであっても互いに愛情を持つて接する、市井の様々な人々が登場する。

巻頭の「帰宅」では、「家出」して「四年」ぶりに夫（ラルマンジア）が帰宅する。妻はその間「戸を叩く人があるたびに」「もしやあのひとでは！」と思つており、「驚きもしない」いで彼を迎え「一言も云はず」に「泣」く。⁽²¹⁾三人の子どものうち「十三になる姉娘」は、すぐに「まあ、お父さんだ！」と言つて、「あたいを愛の結晶と云はなくなたからずるぶんになるわね！」と「いつも胸に蔵つてゐた」言葉を投げかける。⁽²²⁾そこに彼の友人が入つて来る。ラルマンジアは友人の「落着きはらつ」た様子から、「説明されるまでもなく」妻が再婚していることを了解し、新しい「一家の主人」に挨拶する。二人は互いの事情を語り合う。妻の新しい夫は、ラルマンジアを夕食に誘い、妻とともに心を尽くしてもてなす。「子供を寝かすとき」、父親から可愛がられたことを記憶している姉娘は「感情をこめて」「行つちやいやよ！」と叫び、ラルマンジアの「首にしがみついて」皆を泣かせる。⁽²⁵⁾「別れる前に」、新しい夫は「あちこち修繕」された「家の中の様子を彼に見せ」、ラルマンジアは妻と新しい夫に接吻して家を出ていく。⁽²⁶⁾

「帰宅」では、以上のように互いを思いやる登場人物たちの姿が、丁寧に書かれている。

第二に、太宰には隣人愛に関する言及があるということである。鈴木範久・田中良彦編著『対照・太宰治と聖書』⁽²⁷⁾を見ると、太宰は、昭和十六年から昭和二十三年に書いた九つの文章で隣人愛に関して言及している。昭和十六年「犯しもせぬ罪を」⁽²⁸⁾には「完全な人にならう。隣人をこそ愛さなければならぬ」とある。昭和二十一年の「返事の手紙」

には「汝等おのれを愛するが如く、汝の隣人を愛せよ。／これが私の最初のモットーであり、最後のモットーです」とある。同年「苦悩の年鑑³⁰」では、「幼時の読書のうちで、最も奇妙に心にしみた物語」について、「題の傍に」「汝等おのれを愛するが如く、汝の隣人を愛せ」と書かれていた、と述べられている。後の二例から、昭和十一年頃に隣人愛に注目した可能性もあるといえる。

第三に、友人の作家に対するフィリップの評価——その「正義」感によって、「完全」な「叡智」と「独特な隣人愛」の「持主」であったという評価——は、「新しい時代」に関するフィリップの考えと関わっていることである。「新しい時代」は、太宰が随筆で引用している②の書簡に登場する言葉である。「新しい時代」について、フィリップは「我われは本の知識に依らずに、もつと神の近くにある可きである」（17頁）と述べていた。フィリップが「本の知識」を否定的に捉えている点について、「正義」によって「叡智」を「完全な叡智」にすることができると考えられる。そして「神の近くにある」ことについて、「正義」によって「独特な隣人愛」の「知識の持主」になることだと理解することができる。

第四に、「碧眼托鉢³¹」の最初の章「マンネリズム」で、「叡智」という言葉が用いられることである。「叡智」は否定的に語られている。作家がこの随筆「碧眼托鉢」のように「感想を書きつづること」は「ナンセンス」であり、それによって「マンネリズム」に陥るといふ考えが示されている。³²「私は、すべて、ものごとを知つてます。」と言ひたげな、叡智の誇りに満ち満ちた馬面^{うまづら}に、「さうして、君は、何をしたのです」と問いを投げている。³³このような「叡智」への否定は、は、フィリップが「何んでも」「識つてゐる」といふ作家を「亡びゆく文壇人」とする考え（17頁）と共通している。「マンネリズム」といふ章で、「先月、叡智のむなしさに就いて語つた」と述べられるのは、「フィリップの骨格について」の章を指していると考えられる。前の月の「碧眼托鉢（一）」では、フィリップについて「大作

家五十歳六十歳のあの傍若無人のマンネリズムの堆積が、無かつた」と述べられ、「マンネリズム」と無縁の作家であるとされている。⁽³⁵⁾ 以上から、太宰は、作家にとって重要なのは「叡智」ではなく、「正義」によって「叡智」を「完全な叡智」にし、「独特な隣人愛」の「知識の持主」になることができるというフィリップの考えに共感していたのではないかと考えられる。

三 「碧眼托鉢」におけるジツドの受容

最後に、「碧眼托鉢」におけるジツドの受容の独自性はどのような点に認められるのかということ、フィリップに関する同時代の評論を併せて読むことで考えてみたいと思う。

フィリップが、ドストエフスキー、ニーチェ、クローデルから、「歓喜」や「生の躍動」に関わる点で影響を受けた(22頁)ということは、ジツドの講演の前半の主張であった。太宰はジツドの主張の一つのポイントを受容している。

この点をフィリップの性質として紹介することに、特に独自性はない。同時代の評論においても、多くが、フィリップにおける力・意志・歓喜・勇気・熱情といった点について触れている。⁽³⁶⁾ 今野賢三の評論は「小牧兄——」と始まり、小牧から「贈られた」叢文閣単行本の感想を伝えている。フィリップの「熱情」や「歓び」を伝える書簡を引用して「僕といふものがあまりにもしつくりと触れる」と共感しており、それらがニーチェとドストエフスキーとクローデルへの傾倒によってもたらされたことについても触れている。

前章「一」で見た通り、太宰の随筆では、フィリップの「歓喜」や「生の躍動」を具体的に伝えられる書簡がジツドの講演から選ばれて引用されていた。これらの書簡の中で、「早く男らしくなってくれ」と求める⑨⑩のフィリップの書簡からは、太宰がジツドの講演をよく読んでおり、その注記に従って、叢文閣単行本の最後に「三、参考」の「其

四」として付されている資料（106―107頁）にも関心を持ったことがうかがえる。

太宰の随筆は、フィリップが自己の「歓喜」や「生の躍動」を重んじたとともに、「市井の正義派であつた」ことを評価していた。フィリップの異なる二つの性質を指摘し、ジツドの講演にも触れている評論として、吉江喬松と赤松月船の評論について見てみたい。吉江喬松「大地の声——シャルル・ルイ・フィリップ」は、⁽³⁸⁾フィリップについて、「この傲慢と、この無限の柔しき、この一見相反するが如き二つの性情、高き誇りは持てど、冷たくはなれない。深く愛しはすれど身を没することは出来ない。これがまた彼を性格的に苦しめずには置かなかつた。けれど、これがまた彼を不斷に精進せしめずにあなかつた」と述べている。⁽³⁹⁾そして「自身を確立する力」と「深い愛他心」があつたとする。

一つは自身を確立する力であり。⁽⁴⁾これなしでは、彼がなかつたかも知れぬ。他は深い愛他心の発露であり、これなしでは、彼の芸術は存しなかつたかも知れぬ。「中略」兎に角、この二つの性向は、矛盾のやうでありながら実は彼の生命を常に前進せしむる二つの車の輪のやうであつた。⁽⁴⁰⁾

吉江は「ドストイェフスキ」と「ニイチェ」と「クロオデル」について「三者はその援助の力を貸したにすぎない」として、次のようにジツドの講演を引用している。

「有ゆる他の感化は、適当に言へば、フィリップ自身にとつては奨励にすぎなかつた。精力の増援にすぎなかつた。ルユシアン・ジャンの唯一の影響こそは調撰的のものであつた」とアンドレ・ジイドはいつてゐる。⁽⁴¹⁾

吉江の評論は、「ルユシアン・ジャン」からフィリップが受けた「影響」についても触れている。吉江の引用に対応する部分を、叢文閣単行本のジツドの講演の訳文に探すと、次の部分である。

これ迄のいろいろの影響といふのはいはば彼自身を激励するものや氣力を向上させるものだつたのに、このリュ

シアン・ジャンのユニクな影響は緩和といふことを教へたのであつた。(30頁)

吉江の評論は、ジツドが提示したフィリップ像の要点をなぞつているといえる。太宰の随筆の「市井の正義派」という言葉が、ジツドの講演で「正義」について述べられている部分に基づいて考えられたのだとしたら、吉江の着目点に対して、太宰の着目点は次のようにいえる。太宰が目をとめているのは、ジツドがフィリップの受けた影響に「緩和」という別の影響があることを説明してから、更にその後で紹介した、フィリップが友人の作家に書いた序文であつた。序文の中でも特に、フィリップが友人の才能の秘密として示した「正義」を重要なものとして考えたといえる。ここからも、ジツドの講演を独自の関心に応じてよく読んでいることがうかがえる。

赤松月船「フィリップの印象」⁽⁴³⁾という評論は、太宰の随筆と共通する点が多い。フィリップについて「愛と同情」と「何処か強いもの」⁽⁴⁴⁾という異なる二つの性質で説明し、太宰の随筆で引用されている①⑥⑦と同じ書簡を、叢文閣単行本から引用している。赤松の評論では、はじめにクローデルの講演が引用されていることが目をひく。クローデルは、「仏蘭西の文学」には「人類に対する博大な同情と感激のおもひに充ち溢れたところの観察者は之を求むることが出来」ず、「民衆を取扱つた仏蘭西の小説は、凡てこれ彼の貧しく虐げられた人々に対しては、愛もなく同情も持たぬ、氣むづかしい、そして猜疑心に富んだブルジョアによつて書かれたところのものである」⁽⁴⁵⁾と述べている。そしてフィリップは「気分よきころの光りによつて照らされざるかぎりその在るべきところに見出すことの無い、この愛と同情との心こそ」を「仏蘭西文学」に「贈」つたと評価している。このクローデルの講演は、叢文閣単行本の「三参考」の「其二」にも収められている。そして大正十二年十二月二日に行われ「異常な反響」(89頁)を呼び起こしたものと説明されている。クローデルはフランス文学におけるフィリップの位置を簡潔に示している。また、「人類に対する博大な同情と感激のおもひに充ち溢れたところの観察者」というクローデルの評価と、太宰の随筆で「市井の

正義派」という表現で示されたフィリップの性質は、人々を思いやるという点で重なっている。しかし太宰は、赤松とは異なり、同じ本に収められた有名なクロードの講演の言葉を用いてフィリップを説明することはしなかったことが分かる。ジツドの講演を用いてフィリップの性質を示そうとしている。

最後に、太宰の随筆には、ジツドの講演と齟齬する内容も含まれていることを確認しておきたい。①の書簡が「二十五歳」で書かれたとされている点である。ジツドの講演では、①の書簡の前後でフィリップの年齢は述べられていないが、それをジツドの講演から「二十五歳」の手紙だと考えることはできない。ジツドの講演では、『白痴』を「野蛮人の作品」と評価した③の書簡について「二八九七年十二月のことだった」（19頁）と述べられており、「二十八歳にして」と述べられている⑦の書簡は「一九〇二年の十二月」（55頁）に書かれたと述べられているからである。③の書簡は二十三歳の時に書かれたということになる。①はそれ以前の書簡であるので、二十五歳で書かれたとは考えられない。

以上をまとめると、「碧眼托鉢」におけるジツドの受容について、次のようにいえる。ジツドの講演を正確になぞるというものではないが、ジツドの主張のポイントの一つを受容している。叢文閣単行本のジツドの講演に直接取り組み、独自の関心に応じてよく読んでいる。

太宰は随筆で、フィリップが「歓喜」や「生の躍動」に満たされた「市井の正義派であつた」ことを骨格として示している。そのことを、自らの随筆でフィリップ自身やジツドに勢いや熱気のある口調で語らせるといふ工夫をほどこして読者に伝えている。⁽⁴⁶⁾ここからは、太宰がジツドに対して強い関心を持っていたこと、そしてジツドを通して知ったフィリップに対して、作家として同じ土台に立っているという仲間意識を持っていたことがうかがえる。

「市井の正義派」という言葉が、ジツドの講演に基づいて創作されたものだとしたら、ジツドの講演から太宰はフィ

リップが作家として成功した二つの秘密を受容したといえる。

注

- (1) 「碧眼托鉢(一)」『日本浪漫派』第二卷第一号、昭和十一年一月、70～73頁。この随筆を、以下「碧一」というふうに略記する。
 - (2) 『小さき町にて』、岩波文庫、昭和十年十月。
 - (3) 小牧近江訳、叢文閣、大正十五年五月。以下この本を叢文閣単行本と略記する。
 - (4) 「碧一」、71頁。
 - (5) 拙稿「太宰治「碧眼托鉢」におけるアンドレ・ジツドの講演『シャルル・ルイ・フィリップ』の受容」『女子大國文』第百六十三号、平成三十年九月)で、太宰の随筆の本文と、ジツドの講演の訳文を比較することによって、太宰が依拠した本を特定した。以下この拙稿を「ジツド講演の受容」と略記する。
 - (6) 「碧一」、72頁。
 - (7) 注6に同じ。
 - (8) 注6に同じ。
 - (9) 注6に同じ。
 - (10) ①～⑫の数字は、「ジツド講演の受容」末尾の「表A」の「対照表」に対応している。この章の中で触れる書簡に⑧⑨⑩の番号が抜けているのは、この表と対応させたためである。
 - (11) ジツドの講演では、②の書簡の後に、③ではなく、④の書簡が続いている。なぜ太宰が③を先に引用したかは分からない。
 - (12) ジツドの講演で、⑦の書簡は、講演の最後の部分(55頁)で登場する。⑫のジツドの言葉は、それよりも前で述べられている(50～51頁)。
- ⑨⑩の書簡も、叢文閣単行本で⑫よりも後に登場する(106～107頁)。これら⑦⑨⑩について、太宰が随筆で引用す

る際に順番を変えたのは、フィリップの言葉を彼自身に全て語らせた後に、フィリップが「この世に、みなくなつた」ことを惜しむジッドの言葉⑫で締めくくるための操作であろう。

(13) 注1に同じ。

(14) (前出) 「ジッド講演の受容」では、太宰が、叢文閣単行本の本文「半面をさらけ出した」から、「半面を切つた」という表現に変更していることを確認した。

(15) 注6に同じ。

(16) 注6に同じ。

(17) (前出) 「ジッド講演の受容」の末尾の表B「二覧表」に挙げた資料(1.、28.)のことである。

(18) 注2に同じ。

(19) 注4に同じ。

(20) 注4に同じ。

(21) (前出) 『小さき町にて』、16頁。

(22) (前出) 『小さき町にて』、17頁。

(23) (前出) 『小さき町にて』、18頁。

(24) (前出) 『小さき町にて』、23頁。

(25) (前出) 『小さき町にて』、24頁。

(26) (前出) 『小さき町にて』、25頁。

(27) 聖公会出版、平成二十六年六月、49―51頁。

(28) 「序文」宮崎讓詩集『竹槍隊』赤塚書房、昭和十六年二月。引用は、『太宰治全集』第十卷(筑摩書房、一九九〇年十二月、393頁)に拠る。

- (29) 『東西』第一卷第二号、昭和二十一年五月、25頁。
- (30) 『新文芸』第一卷第三号、昭和二十一年六月、23頁。
- (31) 『日本浪漫派』第二卷第二号、昭和十一年二月、103-104頁。
- (32) 碧一、103頁。
- (33) 碧二、104頁。
- (34) 注32に同じ。
- (35) 注6に同じ。
- (36) 例えば、堀口大学の評論(シヤルル・ルキ・フィリップ——訳者の序——)『フィリップ短篇集』近代文明社、大正十二年五月、9-10頁)は、①に関する書簡を引用してから、「フィリップが後年如何なるものになつたか」と述べ、「彼が彼自身のうちに見出して、取り出して、われ等に見せて呉れた、あの力と、あの意志と、あの生の歡喜と、あの勇氣とを思はねばならぬ」として、ジツドの評論に触れている。中村星湖の評論(四月号創作の読後 今や野蠻人が必要だ(二))『朝日新聞』東京朝刊、大正十三年四月十六日)は、「フィリップの目ざしてゐた物がこゝに、この「熱情」にある事を知り、僕自身を籠めての今日の時代が求め(て)ゐた物がこゝにある事を考へて、僕は非常に愉快になつた」と述べている。
- (37) 今野賢三『シヤルル・ルイ・フィリップ』を讀んで、『文芸戦線』第三卷第七号、大正十五年七月、46-47頁。
- (38) 吉江喬松「大地の声——シヤルル・ルイ・フィリップ」『新潮』第三十七卷第六号、大正十一年十二月。以下この評論を吉江評論というふうに略記する。
- (39) (前出) 吉江評論、48-49頁。
- (40) (前出) 吉江評論、49頁。
- (41) (前出) 吉江評論、50頁。
- (42) 赤松月船「フィリップの印象」『文章俱樂部』第十三卷第三号、昭和三年三月。

(43) (前出) 赤松評論、60頁。

(44) (前出) 赤松評論、63頁。

(45) 注43に同じ。

(46) (前出) 「ジツドの講演の受容」では、太宰がフィリップの言葉を引用する際に、勢いや熱気のある口調を強め、フィリップが意欲、抵抗、強さ、意志、勇氣、力を持っていることを強調していることを確認した。

〔付記〕 引用は初出誌に抛り、旧漢字を新漢字に改めた。

拙稿は、二〇一三年度同志社女子大学研究助成金「奨励研究」による。深く謝意を表する。

(本学講師)